

客觀的心理學に就て

千 葉 胤 成

客觀的心理學と云ふときは吾人は直にベヒテレンの „Objektive Psychologie” を思起すのであるが、茲に所謂客觀的心理學は此の如き狹義のものを意味するものではない。即所謂客觀的心理學は極めて廣義のものを意味して居るのであつて、輓近英米兩國並に露國に勃興して居る諸種の傾向を包括して居るものである。是等諸傾向は固より各其趣を異にして居るのであるが、從來の心理學に比し著しく客觀的傾向を帯びて居るといふ點に於て相一致する所がある。吾人は茲に單に客觀的傾向と呼ぼうと思ふ。蓋し客觀的てふ語は後に述ぶるが如く甚だ曖昧ではあるが、夫丈包容性を有することが多いからして、今は暫く此客觀的傾向てふ語を用ゆることにする。然るに從來の心理學よりも著しく客觀的傾向を帯びて居る是等の心理學は凡

そ之を三つに歸せしむることが出来る。即機能心理學的傾向、行動心理學的傾向、反射心理學的傾向是である。以下各に就て其要旨を述べやう。

二

先づ機能心理學的傾向と云ふのはエンゼル、カルキンスの一派によりて創始せられた所である。エンゼルは其心理學に於て主として常人の意識的事實及其構成並に活動の様式及其發展を研究するにありとし、兒童心理學、變態心理學、社會心理學及動物心理學より材料をとり來り、特に心的事實に伴ふ生理作用に注意せるのみならず、社會的及物的還境に對する順應の仕方を重視して居る。又カルキンスは自ら機能心理學を批評して居るにも拘はらず、此還境に對する順應の状態を一層重視し、心理學は還境に對する關係に於ける自我の學なりと定義して居るのを以て見れば亦根本上に於て同一傾向に屬すと見なければならぬ。^(一)但し彼にありては還境に對する反應は生理的の外社會的意味を有して居るが、此にありては自我に特に關係あるものとせる點に於て稍其趣を異にして居るに過ぎぬ。^(二)

次に行動心理學的傾向はマクドゥガル、ワトソン、バumerイ等の唱導する所であつ

て、心理學を以て人間又は動物の『行動』(„behavior“)を研究するにありとして居る。ハクドゥガルによれば、吾人は自己の意識の直接知識を有するも他人の意識に至りては其行動によりて推するに過ぎぬ。故に之のみによりて一般人類に適用せらるべき結論に到達することが出来ぬ。即科學としての心理學の任とする所は生物の行動を記載するにあり、詳言すれば有機體が全體としての活動或は統一體としての活動を研究するにありとして居る。ワトソンも亦純粹客觀的實驗的自然科學の一部として恰かも物理學化學の如く内省を要せず意識の問題を煩はさずして行動の研究を行ふことが出来ると云つて居るが、而かも此の如き心理學は從來の内省的學としての心理學の重要問題を忘るゝものにあらず、却りて其等問題の解明に役立つものであるとして居る。併し其著は其名の示す如く比較心理學の入門に過ぎぬ。(四)

マクドゥガル、ワトソンは心理學は行動の學なることを明言して居るが、バイメリーに至りては稍趣を異にして居る。即彼も云つて居るやうに一般生物學殊に動物學、神經學、發生學、比較心理學及人類學の研究をとり來りて人類行動の分解を試み、かくて心的及社會的現象は凡て生物學的用語に歸せしめ得ること恰かも生活現象が化學的、物理的、用語に歸せしめ得るが如しとして居るが、此の如き、試が心理學なりや否やに

就ては何等云ふ所ないのである。^(五)

第三に反射心理學的傾向と云ふのはベヒテレフの主張する所であつて心理學の概念を甚だ廣義に解し意識現象のみならず一般心的生活の學なりとして居る。或は之を客觀的心理學と名けて居るが、吾人の廣義の客觀的心理學と混同する恐があるから、茲には反射心理學の名をとることとする。ベヒテレフによれば心理學の任務は甚だ廣汎であつて、あらゆる心的作用及心的作用に近き又は之と直接の關係を有する生物學的作用の研究亦心理學の對象でなければならぬ。所謂心的は唯に主觀的のみならず常に其に伴ふ腦髓内の客觀的或は物質作用を意味する。即心的は實際は『神經心』(“Neuropsyche”)を意味するのである。而して外部影響と此神經心の外部現象との間の關係を研究する所のものを彼は『精神反射學』(“Psychoreflexiologie”)或は『客觀的心理學』(“Objektive Psychologie”)と名けたのである。故に此意味に於ける心理學は全然内觀を排除しあらゆる心的作用を客觀的規正により研究せんとするにある。更にゲルンの唱導する所亦此に屬せしめることが出来る。彼によれば生活の存する所獨り精神存し、生活體のみが精神を有する。然らば生活體の表徵は何ぞやとの疑問を掲げ之に對し『反應』(“Reaktion”)を以て答へて居る。精神其者は吾人

の觀察し得る所ではないが、其本質的活動は之を認知することが出来る。而して刺戟と反應との間に知るべからざる精神存する。かくて心理學は知るべからざる精神を排除せる生活體の反應の學なりと結論して居る。^(七)

三

以上客觀的心理學に屬する諸傾向の主張する所を概觀したのであるが、吾人は之が批評を試むるに當りて、先づ吾人の心理學の概念及研究方法に關する一般見解を略述しやうと思ふ。

抑心理學が意識現象の科學たりてふことに就ては、從來多くの學者の殆んど一致する所である。例へば、^(八)ヴントは心理學は直接經驗の學なりといひ、又エビングハウスは心理學は精神生活の内容及作用の科學なり、換言すれば意識狀態及意識作用の科學なりとし、^(九)テイチナーは心理學の對象は心なれども、心理學的研究の直接の對象は常に意識にありと云つて居る。但し彼は近著に於て意識の語を除去しては居るが、^(十)そは唯名の問題であつて根本の思想の變更したのではない。更にチーエンも亦心理學は腦髓生理學的並行現象に應ずる心的現象を取扱ふものであるとして居る。^(十一)

リップスは特に自我てふ概念を高調して居るがなほ心理學は意識經驗の學なりとせる點に於て同じである。即彼によれば心理學は自我及自我内に於ける事象の經驗的學なりと云つて居る。吾人はレーマンと共に是等の定義を要約し心理學は意識現象の科學なりとせんとするのである。^(十三)凡そあらゆる現象中吾人が最も直接に經驗し得る事實は意識の存在といふことである。外界の存否如何は之を疑ひ得るとするも意識の存否に至りては吾人之を疑ふことを得ず、意識の存否を疑ふ是亦一の意識現象たるを失はぬのである。即意識は吾人の直接に經驗する所であつて其存在は到底之を拒むことが出來ぬ。同時に吾人の許さざるべからざる三つの屬性がある。即そは變化的、統一的、相對的である。

先づ吾人に最も著しいのは意識が變化的なるとである。恰かも流水の如く變轉極りなく瞬時も停止するとのない者である。此事は吾人が或意識狀態を其儘に持續せしめんと努力するとき最も明かである。吾人は如何に努力するも一定の意識現象を同一狀態に保留せしむることが出來ぬ。同一狀態に保留せんとするとき既にそは同一狀態に非ず刹那々に變化し行くことを認むることが出来る。次に變化的なる意識の各瞬間につきて之を見る時は、そは雜然紛然たる者に非ずして一定の組織

をなし、其各部分は全體に對し或關係を有するのみならず前の瞬間と後の瞬間と亦一定の關係を有する者なるを認むる者が出来る。即ち全意識は統一的體系をなすものである。更に考ふるに此變化的而かも統一的なる意識は意識として獨り存在するものに非ずして必ずや客觀の對立を預想する者である。意識の存在は直接の經驗であると云つても同時に其處に客觀世界の存在を假定せずしては意識の存在も何等の意識を有しないととなる。即ち意識の存在は絶對的に非ずして相對的であるを許さねばならぬ。故に意識現象は客觀の對立の下に絶えず變化する統一的體系であるといふと出来る。即ち變化的、統一的、相對的てふ此三つの屬性は意識の存在を考察すると同時に許さなければならぬ三つの大なる事實である。

然るに意識の此三大屬性は適々以てそが因果的考察を施し得るものなることを示すものと云ふことが出来る。先づ第一に意識現象にして絶對的存在なりとすれば其自身の中に於て自ら自己を考察するものであるから其自身に價值を有するのみであつて毫も之によりて因果的考察を施すことが出来ぬ。従つて普遍的價值を有することが出来ぬ。即ち因果的考察を施し得るためには該現象以外の他のものによらなければならぬ。即ち現象の存在は相對的たることを預想せざるを得ない。

然るに意識現象の存在は絶對的にあらず相對的であるから之が因果的考察を施すことが出来る。次に意識現象は相對的存在なりとするも雜然たる集合體に過ぎずとすれば其要素相互の間及其要素と全體との間に何等の關係がないから之に對し因果的考察を施すことが出来る。即要素相互の間及要素と全體との間殊に前後の狀態に對し一定の關係を有するときは之に對し因果的考察を施すことが出来る。

然るに意識現象は統一的體系をなして居るのであるから之に對し因果的考察を施すことが出来る。終りに意識現象が相對的存在にして統一的體系をなすとするも常恒にして不變的なるときは之に對し因果的考察を施すことが出来る。其現象が他によりて考察せられ要素相互並にそが全體に對し一定の關係を有すとするも、各瞬間に何等の變化を顯はさぬとすれば各要素に分解し種々なる條件の下に如何なる狀態を呈するかを究明することが出来る。即之に對し因果的考察を施すことが出来るのである。然るに意識現象は變化的であるから此意味に於て亦因果的考察を施すことが出来る。茲に因果は通例の意味に於けるものを指し心的因果てふ特殊の意味を有せざること云ふ迄もない。

此の如く相對的統一的變化的てふ意識現象の三つの屬性は其因果的考察を施し

得るものなることを示して居るのである。然るに心理學の領域内にありては意識現象の因果的考察を以て其任務とする。意識の本質起源等に關しては別に論究を要するが、それは吾人の叙述の範圍を脱して居る。吾人は唯意識てふ現象につき因果的考察を試むれば足るのである。意識現象は云ふ迄もなく宇宙の森羅萬象、中の一部であり、心理學は即此意識てふ特殊現象に就き因果的考察を試むるものである。勿論實際の研究に際しては必ずしも吾人の直接の經驗のみによるものではなくして後に述ぶるが如く種々間接の方法により研究することもあるが、是等間接の方法は意識現象を研究する手段たるに過ぎないのであつて、此場合にも吾人の研究の對象たるものは意識現象を出でないのである。故に吾人は心理學は意識現象の科學であると云ふことが出来る。

四

吾人は已に心理學は意識現象の科學であるとした。然らば此の如き心理學に於ける研究を徹底せしむるためには自ら亦二つの方法によらなければならぬ。即觀察及實驗是である。觀察法は自然に生起する現象につき考究を遂げ以て其現象の

性質を考察するにあり、實驗法は之と異なり考究せんとする現象をば或條件の下に殊更に生起せしめ其條件の如何によりて該現象が如何なる變化を呈するかを見て其現象の性質を論證するにある。

前既に述べたる如く心理學は意識現象の科學である。而して意識現象も亦他の諸現象と同じく吾人の觀察に現はれ來るものであるが、之に二つの途がある。一は自己の意識現象が直接吾人の觀察に現はれ來るものであつて所謂内省又は内觀と稱するものが是である。他は他人の意識現象が或形を假りて吾人の觀察に現はれ來るものであつて一言にして云へば動作として現はるゝものである。更に又一種の觀察法がある。それは他人が自己自身の意識を觀察し又は更に他人の動作を觀察し之を敘述によりて吾人に報告するものであつて、間接に意識現象を觀察するにある。前一者は之を直接觀察と稱し後二者は之を間接觀察と云ふことが出来る。此の如く心理學の觀察法には種々あるも何れの場合にありても他の科學に於ける研究と根本的の差異あるを見ない。或は内省又は内觀を以て心理學の特徴となし他の科學と此點に於て根本の差異ある如く見る者もあるが、そは皮相の見に過ぎない。所謂内省又は内觀せらるゝ意識は既に客觀性を帶び内省又は内觀する自己と

區別せられる。然らば内省又は内観する所のものは何であるか。こは既に心理學の研究の領域を脱し更に他の考察を要する。吾人は唯觀察に直接なると間接なるとの差異あるを見るのみである。兎も角觀察法が心理學研究の重要な方法たるや明かなりといふべきである。

併しながら心理學が單なる觀察法のみによりて考究せらるゝ間は科學としての完全なる發達は得て之を望むことが出來ぬ。抑心理學の觀察法は或個人の意識經驗を告知するに過ぎぬ。従つて研究の材料は偶然的産物に過ぎざるを以て一般的價値少く之によりて普遍的法則を導出することは困難である。此缺陷を補ふ所のものは實に實驗法である。蓋し心理學の研究對象たる意識現象は不變なる物體にあらずして變化する作用である。故に其作用の起源進行の状態を觀察し其作用をなす要素に分解し及該要素相互の結合の關係を研究せんとすれば種々なる條件の下に殊更に或意識作用を惹起せしめ其變化の状態を研究するを要する。即實驗法によらなければならぬ。但し此場合に吾人の直接に知り得るものは他人の動作又は言語によりて發表せらるゝ所のもので自己の意識につきては殆んど實驗を施すことが出來ぬ。併し實驗の媒介者たる動作又は言語は意識現象の準則又は其補助

者であつて吾人の研究の對象ではない。吾人の研究する所は其によりて知り得べき意識現象にあるのである。此の如き關係は獨り意識現象のみに存するにあらずして一般に物理現象又は生理現象を研究せんとするや吾人は又何等かの媒介物を要する。例へば溫度を測定するに水銀柱を以てするが如きである。水銀柱は唯溫度を示す準則に過ぎず、吾人の研究の對象は水銀柱にあらずして溫度其者にあるのである。即心理學に於ける實驗と他の科學に於ける實驗と全然別種のものとなすは大なる誤であつて根本に於て相一致するものと云はなければならぬ。而して其確實性如何は一に實驗裝置の精粗と實驗關與者の注意如何によるのみである。唯茲に注意すべきは觀察法を忽諸に附すべからざることである。勿論他の科學に於ても然らんも殊に心理學に於ては割合に直接なる觀察法即内省又は内觀がある。心理學の實驗に際し是等觀察が重要なる規正者たることは最も注意を要する所である。即觀察と實驗とは科學的心理學に缺くべからざる二大研究方法であると云はなければならぬ。

五

心理學の概念及其研究法に關する吾人の見地は以上述ぶる如くであるが然らば此の如き見地よりして所謂客觀的心理學なるものを觀れば何うであらうか。吾人は先づ所謂客觀的心理學の三傾向各につき論評し次に全體に關して吾人の所懷の一端を述べんとするのである。

先づ機能心理學的傾向につきては、エンゼルが吾人の心的作用に伴ふ生理作用に注意し、社會的及物的環境に對する順應の仕方を重視して居るのは不可なる所以を見ないのであるが、所謂全體としての活動のみが活動の全體ではない。殊に科學的研究としては寧ろ出來る丈之を要素に分解し其要素相互の關係を考究するを以て其重なる任務としなければならぬ。而して分解の精緻なるほど益科學の發達を促すものであるから、科學の進歩を願ふものは亦分解の精緻を力めなければならぬ。或は實際の精神活動は實驗室内に於ける心的作用とは大に趣を異にして居るとして心理學的分解の價值に疑を挿むものもあるが、こは一理あるに似て而かも決して然らずである。實際人生の活舞臺に現はれて居る精神的活動が實驗場裡に於ける心的作用と大に趣を異にするものあるは論者の云ふ如くである。併しながら之を以て實驗の價值を否定することは出來ぬ。蓋し實驗場裡に於ける分解抽象は一般

42
 の原理を見出さんとするを以て目的として居る。實際の應用如何は學究の關與する限りではない。これは他の科學に於けるも全く同様である。實際の物理現象化學現象は實驗場裡に現はるゝ物理作用化學作用とは大に趣を異にするものもあるも物理學者化學者は毫も之を顧慮するを必要とせぬ。唯物理作用化學作用に關し分解考究を遂げ一般の原理を探究すれば足るのである。心理學の應用的方面の研究亦吾人の歡迎する所であつて、かの米國の如き今や歐洲大戰に参加するに當り既に多くの心理學者をば戰時に於ける各種心理的研究の事業に従事せしめつゝあること最近の雜誌の報ずる所である。^(十五)併しながら心理學者が唯實際の活動のみを云々して徒らに應用的方面に走るは既に分解的研究に飽きたるを證するものであつて科學的態度を持つるものゝとらざる所である。他國に於て然るが故を以て我國亦然らざるべからざる理由は存せぬ。勿論機能心理學者の所謂機能の研究は分解的研究に幾多の光明を與ふるあり殊に應用的方面に於て裨益する所大なるを以て此種の考察は決して無用のことではなからうと思はれるが、ために彼等が分解的研究の價値を輕視する傾向あるは最も注意しなければならぬことである。

次に行動心理學的傾向に於て行動を以て心理學の研究の對象なりとするは心理

學を否定するものである。マクドゥガルが科學的心理學の任とする所は生物の行動を記載するにありとして居るのは甚だ矛盾の言と云はなければならぬ。行動を記載するは行動學と云ふべく之を以て心理學の任とするは矛盾の甚しきものと云ふべきである。殊に又有機體が全體としての活動或は統一體としての活動を研究するにありと云ふのを以て見れば機能心理學の弊を反復して居るものであつて機能心理學に對する批評は亦此に適用することが出来る。又ワトソンが内省を要せざる心理學と云ふことを云つて居るが、内省なき心理學とは果して如何なるものを云ふのであるか。若又彼の云ふ如く内省心理學の問題の解明に役立つものであるならば其意味に於て矢張心理學であつて所謂行動は手段にして研究の對象ではないことになる。更にパーメリーは心的及社會的現象が凡て生理學的用語に歸せしめ得るに至ると云つて居るが、然らばそれは心理學と稱することが出来ぬではなからうか。勿論心的現象も他面より見るときは生活現象であり又は物理現象化學現象であるかも知れないが、如何に他の科學の用語に翻譯し得るとするも心理現象は依然として他面に存在を失ふことはあり得べからざることであつて、翻譯し得るてふことゝ歸着せしめ得るてふことは混同すべからざることである。此の如きは所謂生理

的説明なるもの、共有する通弊であつてとるに足らざる謬見であると云はなければならぬ。

終りに反射心理學的傾向に關してはベヒテレフの所謂反射心理學も如上二傾向と頗る類似の點がある。彼は心的は唯に主觀的のみならず其に伴ふ腦髓内の客觀的或は物質的作用を意味するとして居るが、腦髓内の如何なる物質作用なるかは今日に於て之を明言することが出來ぬ。又たとひ他日之を明かにすることが出來るとしても心的は心的として依然存在し、決して物的となり了することはあり得べからざることである。而して外部影響又は外部現象は心理學の研究の對象にあらずして手段準則たるに止るものでなければならぬ。ベヒテレフも亦内觀を排除すべきを高調して居るが、ゲルンが精神を排除せる生活體の反應と云つて居るのと同様にそれは生理學の領域に屬するものと云ふべく心理學の研究對象とすることが出來ぬ。思ふにベヒテレフは之によりて新しき學問の領域を開拓せんとしたものであらうが其云ふ所頗る曖昧にして徒らに新を逐ふ觀あるを免れぬ。他の之に類する傾向と同じくこは單に一の試にして之を以て一の學となす尙早きに過ぐる嫌なきにあらずである。『所謂客觀的規正なるものは決して研究の對象にあらずして其手

段たることを忘れてはならぬ。

六

以上三つの傾向は各其主張を異にし趣の違存するなきにあらざれども、前述の如く何れも心理學の研究は客觀的動作行動に重きを置くべきを高調せる點に於て相一致するものと云ふことが出来る。即機能心理學的傾向に於ては人間及動物の環境に對する順應殊に有機體が全體としての反應を重視し、行動心理學的傾向にありては生物の行動を研究するを以て心理學の任とし、バナーリクの如きは行動の學に獨立の地位を與へ、更に客觀心理學的傾向にありては全然客觀的規正による心的作用の研究を以て心理學の任として居る。彼等が動作行動に重きを置き一新研究の方面を開拓せんとする努力は甚だ喜ぶべきであるが吾人を以て之を見れば其根柢に於て大なる謬見の存して居るやうである。蓋し吾人が直接に知り得るは自己の意識のみに限り他人の意識に至りては之を間接の方法殊に表出運動又は外部動作によりて之を知る外に途がないのは彼等の論ずる如くである。併しながら研究の方法又は手段と研究の對象とは峻別するを要する。吾人が心理學の研究に際し客

44
 觀的行動動作をとり來るも是れ單に研究の手段補助たるに止り決して研究の對象たるものではない。研究の對象は全く意識現象に存すること前已に述べたる如くである。或は客觀的心理學の主張する所何れにありとするも自ら亦意識現象を取扱つて居る所ありとして之を辨護する者あらんも此の如きは甚しき矛盾であつて學者は須らく其態度を明瞭にして研究に従事すべきである。即客觀的心理學が其研究の對象に對する見解は誤れるの甚しきものと云ふべく若夫れ機能、行動、反射其者が研究の對象となると云はゞそは既に心理學たるの名を除くべく正々堂々機能學、行動學、反射學を樹立すべきである。併しながら事茲に至れば心理學とは全然沒交渉なるべきを覺悟しなければならぬ。

次に客觀的心理學にありては其研究方法として亦所謂客觀的方法を重要視するよりして勢自ら内省又は内觀を輕視する傾向が生ずる。此の如き傾向は前述の如く到る處に之を見出すことが出来るが殊にベヒテレフの如きは全然内觀を排除して心的作用を客觀的規正のみにより研究せんとしワトソンに至りては全然内省を要せず意識の問題を煩はさずして行動の研究を行ふことが出来ると極言して居る。併しながら内省を排除せる心理學なるものが果して成立し得るやは甚だ疑ふべき

ものがある。所謂内省を除去せる行動の學客觀的規正による反射の學なるものは實に行動學反射學たるに留り其自身心理學といふことを得ず心理學の研究に役立つ限りそは心理學の補助たるに留ると云はなければならぬ。其故にテイチナーの如きも其新著に於て意識の語を避け内省の語を除かんとして居るにも拘はらず猶時として觀察の語によりて内省の意を偶したる所少なからずある。ラクミツヒは千九百五年より千九百六年に至る米國の一般心理學雜誌に現はれたる論文中内省的研究は非内省的實驗的研究の約二倍半ありとし而して過去十年間に於て常態の成人心理學に致せる貢獻は他の何れの方法よりも内省に負ふ所甚大なりと云つて居るが實際の狀況を報告したものと云ふべきである。要するに心理學の研究に際しては内省又は内觀一般に觀察と實驗とは兩々必要缺くべからざる方法であつて何れを重視し何れを輕視することが出來ぬ。オシップ、ルリエの云へる如く心理學の方法は單に主觀的にもあらず又單に客觀的にもあらず兩方面より進まなければならぬと云ふべきである。^(十八)

更に注意すべきは客觀的心理學に於ては分解的研究を蔑視することである。これは殊に所謂機能心理學的傾向に於て甚しいやうである。彼等は云ふ、意識は生活

する繼續事象である。然るに分解學者は解剖せんがために之を殺したために意識を原初の形に於て示す能はざるに至ると。併しながらテイチナーの評したやうにこれは生物學に於ても同様である。生物學者が組織をば筋纖維或は神經細胞の複合として記述するとき誰人も纖維及細胞先づ存し有機的生長の法則により組織を形成するため持來さるてふ事を意味するものはないであらう。此際生長する所のものは纖維及細胞よりなる組織其者である。即心理學者が意識をば感覺の融合觀念の結合よりなると考ふるのは恰かも生理學者が筋は纖維よりなると考ふると同一である。心理學者の目的が意識を知り之を理解するにありとすれば其唯一の途は意識をば個々に分解するにあり分解なくして科學的研究を遂げんとするは不可能のこと、云はなければならぬ。心理學が哲學の羈絆を脱し科學として獨立の地歩を占むるに至つたのは僅かに數十年來のことに屬する。而かも早く既に科學的研究の第一の任務たる分解を厭ふに至つたのは甚だ奇怪なることであつて吾人は益精緻なる分解の武器によりて意識の本據に押進まなければならぬと思ふのである。以上のことと關聯して猶茲に注意しなければならぬのは心理學の研究は行詰であるといふ言を間々耳にすることである。抑最初心理學の研究の對象となつたの

は主として所謂意識の客觀的方面で其主觀的方面の研究は割合に近時に屬して居る。恰かも哲學に於て世界の問題先づ起りて近世に至り主觀の研究に向ひしと甚趣を同じくするものがある。然るに意識の主觀的方面の研究は往々にして吾人を哲學的思索に導くものがあり其研究の困難なるよりして科學的研究を施し得ざるものと思惟さるゝに至つたのである。併しながら此考は同時に一方に於ては意識研究の鑰は此方面にありといふ考を起さしめ、從つて從來の所謂客觀的方面の研究は既に行詰であり價値なきものとして考へらるゝやうになつたのである。これは併しながら謬見であると云はなければならぬ。所謂客觀的方面の研究も未だなほ問題を以て充されて居り其研究の興味の點に於て敢て主觀的方面の研究に劣つて居ると云ふことが出來ぬ。吾人は敢て問題の古きを患へず其研究の態度の如何を憂ふるのみである。元來吾人の研究の題目は到る處に充滿して居る。問題は盡されて居るとか行詰であるとか云ふ者は實際の内狀を知悉せざる者の嘖語に過ぎぬ。徒らに新を追うて結局何者をも得ることなきは甚だ遺憾である。吾人の研究の範圍は廣大にして研究の題目は横溢して居る、吾人は唯興趣の趣くが儘に之を追及すべきである。客觀的心理學の問題とする所は寔に一新生面なるやも知れぬがそれ

50) は問題である。何等かの獲物はあらうと思はれるが或は預期に反することがあるかも知れぬ。近詩發生學的研究なるもの勃興し高等なる意識の産物たる宗教藝術をば原始時代に溯りて研究せんと努力しつゝあるが研究の一面として必ずしも不可ではないが果して何者をか獲たであらうか。學者は興味に従ひ之に趣くを妨げないがこは熟考を要する。ギョラーは行動論は心の表徴の論にして心理學に代るべき組織にあらずと云つて居るのは味ふべき言であると思はれる。

(二十)

七

終りに一言しなければならぬのは吾人の一般の研究の態度についてである。學術研究の態度は凡そ之を二つに區別することが出来る。即ち一は矛盾の點を過重するもの他は一致の點を重視するもの前者は分解に重きを置き後者は綜合を主とするのである。即ち前者は自然をば事實の集合と見るに反し後者は法則の體系と見、従つて前者は經驗を重んじ直觀に基きて主張するに反し後者は理論を主とし概念に訴へて論述する傾向がある。此二種の態度の孰れが正當なりやと問はゞ吾人は共に正當ならずと答へざるを得ない。カントが云つたやうに『直觀なき概念は空虚に

して概念なき直観は盲目である『勿論兩態度は到底離るべからざる關係にあるのであるが少くとも研究の出發點に際し研究者の胸中には自ら一定の傾向あり其度各種の事情條件により各人一なるを得ぬものである。併し大體に於て經驗に重きを置くとき吾人之を科學的と云ひ概念を主とするとき之を哲學的の語を以て言表すとするときは學術研究の態度には矛盾の點を重視し分解に重きを置き直観に基く經驗的科學的なると一致の點を重視し綜合を主とし理論を尊び概念に訴ふる唯理的哲學的なるとあると云ふことが出来る。若し一方のみ眞にして他は不眞なりとせば大なる誤であつて兩者は常に共存し而かも各人により其共有の度を異にして居るものと云はなければならぬ。

然らば吾人は果して如何なる研究の態度に出で、吾人の立脚地とすべきであるか。吾人は哲學者にあらず科學を研究せんとするものである。固より分解、經驗、直観を重んじ之を基礎とし根柢としなければならぬのは勿論であるが其後景に於て綜合、理論、概念の指導者がなければならぬ。蓋し眞に科學を研究せんとするものは哲學の後景あるを要し又哲學を研究せんとするものは其材料を科學の範圍よりとり來らなければならぬ。而して科學研究者と哲學研究者との分るゝ所以は其各主

とする點の相違にあるのみである。即ち一は實行者の位置にありて見者の境を窺ふもの他は見者の地位にありて實行者の境を看るものである。吾人は即經驗を重んじ其奥底に於て常に理論に着眼しつゝ進むべきである。

吾人は學術研究の態度を論じ哲學的態度と科學的態度とを區別したのであるが今觀察殊に内觀と實驗との關係について此態度を應ぜしむることが出来る。即ち内觀を過重視するものは哲學的態度に應じ實驗を過重視するものは科學的態度に應ずるものである。換言すれば心理學の中に哲學があり科學が存する。勿論此對應は嚴密なる意味に於て云ふのではなく其態度に類似の點あるよりかく分つに過ぎないのである。吾人は之につき最早細説することをせぬ。唯茲にはカントの口吻をかりて次の如く一言すれば足る。曰く『實驗なき内觀は空虚にして内觀なき實驗は盲目なり』と。所謂客觀的心理學のために吾人の憂ふる所は、それが餘りに盲目なる點に存する。

參考書目

- (一) Angell: *Psychology. An Introductory Study of the Structure and Function of Human Consciousness*, 1905.
- (二) Galpins: *A First Book of Psychology*, 1914.
- (三) Mc Dougall: *Psychology. The Study of Behavior*, 1912.

- (四) Watson: Behavior. An Introduction to Comparative Psychology, 1914.
- (五) Parmelee: The Science of Human Behavior, 1913.
- (六) Bechterew: Objective Psychology, oder Psychoreflexiologie, 1913
- (七) Gern: Psychologie als Lehre von den Reaktionen, 1909.
- (八) Wundt: Grundriss der Psychologie, 4, 1901.
- (九) Ebbinghaus: Grundzüge der Psychologie, 2, 1913.
- (十) Titchner: Text Book of Psychology.
- (十一) Titchner: A Beginners Psychology, 1915.
- (十二) Ziehen: Leitfaden der Physiologischen Psychologie, 4, 1908
- (十三) Lipps; Leitfaden der Psychologie, 3, 1909.
- (十四) Lehmann: Psychophysiologie, 1912.
- (十五) Psychological Bulletin, 1917.
- (十六) Titchner: A Beginners Psychology, 1915.
- (十七) Bruckmich: The Inst Decade of Psychology in Review. (Psychological Bulletin, 1916).
- (十八) Lourié, Ossip: Note méthodologique. (Rev philosophique, 1916).
- (十九) Titchner: Past Decade in Experimental Psychology. (American Journal of Psychology, 1910 & 1911).
- (二十) Gioler: The Conscious Cross-Section, 1915.